

資 料

青年期にがんで親を亡くした人の死別後の気持ち：闘病記をとおして

金子 尚 世¹⁾, 小 柳 夕 佳¹⁾, 園 田 久美子¹⁾,
山 口 博 愛¹⁾, 阪 本 恵 子²⁾

¹⁾長崎大学医学部保健学科看護学専攻, ²⁾大阪市立大学医学部看護学科

要 旨

目的；青年期にがんで親を亡くした人の死別後の気持ちをあきらかにする。

方法；闘病記より，青年期にがんで親を亡くした人の死別後の気持ちが表現されている言動を，逐語録化し分析した．具体的には，前後の文脈と表現された言語の意味をコード化しカテゴリー化した。

結果；4つのカテゴリー，すなわち，1．親の死を受け止められない，2．親との生活を振り返る，3．進路や人生観が変化する，4．親のいない生活への適応，を抽出した．なお，それぞれのカテゴリーには複数のサブカテゴリーで構成されていた。

青年期に親と死別した人の気持ちは，学校（高校など）でも家でも感情の板挟みとなって葛藤を繰り返す，誰にも打ち明けられずに孤独に耐える．しかし，生前の親との時間や親の生きざまを想察することで，死と向き合い始める．また，その後の進路や人生観の変化も，生前の親からの学びが，対象者の気持ちに影響を及ぼしている。

キーワード：青年期，親の死，死別後の気持ち，がん

はじめに

親との死別は人生の中でも極めて精神的ダメージの大きい経験である．終末期看護では，家族に対し，死別後の気持ちを考慮したケアが必要であり，力を入れている．しかし死別後，看護者が家族に関わることは少なく，その気持ちを知ることは難しい．

がん終末期における家族ケアの必要性が注目されて以来，数々の研究が行われてきた．しかし，その対象は配偶者や親など壮年期以降の大人，若しくは幼くして親を亡くした小児・学童が主で，青年期を対象にした研究は少ない^{1,2)}．青年期での発達課題における喪失体験を取り上げた先行研究は少なく，今回，少ない文献ではあるが文献研究の形で取り組むこととした．

なお，ここでは，青年期にがんで親を亡くした人の死別後の気持ちを取りあげる．ハヴィガースト³⁾は，青年期を「両親やその他の大人から感情的独立を達成する時期」としている．この時期に親を亡くするというライフイベントは発達課題の達成に大きな影響を与えると考える．

目 的

本研究の目的は，青年期にがんで親を亡くした人の死別後の気持ちをあきらかにすることである．

方 法

- 1．研究デザイン：質的帰納的研究を採択した．
- 2．研究対象：青年期にがんで親を亡くした内容記載のある著書6冊，12事例．
- 3．研究期間：平成18年5月～12月．

2007年5月29日受付

2007年11月14日受理

別刷請求先：阪本恵子，〒0545-0051 大阪市阿倍野区旭町1-5-17
大阪市立大学医学部看護学科

4. 分析方法：

- 1) 闘病記から親との死別後の気持ちが表現されている言動をすべて生データとして抽出し、逐語録として起こした。
- 2) 逐語録を繰り返し読み、前後の文脈と表現された言語の意味からコード化した。
- 3) コード化した内容の共通性と相違性に基づいて類型化し、クラスタリングとラベル付けを行った(サブカテゴリ)。
- 4) さらに類型化し、カテゴリとした。

なお、すべての研究過程において全員の意見交換を重視して進めた。

5. 用語の定義

- ・「青年期」…男女、13歳～25歳の自我意識が著しく発達する時期とした。
- ・「闘病記」…がんで親と死別した直後からの気持ちが記録された出版物とした。また、①著者が青年期にがんで親を失った本人である、②インタビュー形式で本人の直接の気持ちがわかるものの2つに限定した。何人もの闘病記が1冊にまとめられた短編集もそれぞれを1つの闘病記とみなした。

- ・「気持ち」…その場に身を置いて、その人が感じる感情。

結 果

1. 闘病記の概観 (表1)

amazon でキーワード「がん」で検索し4941件がヒットした。さらに、タイトル、研究目的に絞り「青年期」、「親の死」、「死別後の気持ち」で検索し、6冊の著書が該当した。その中の12事例を対象とした。

2. 対象の属性 (表1)

対象の親は死亡時40～51歳、がんの種類は消化器系7名、呼吸器系1名、子宮がん1名、乳がん1名、耳下腺腫瘍1名、不明1名で、闘病期間は1ヵ月～9年であった。闘病記出版の著者の性別は、女性6名、男性2名、不明4名で、死別時の年齢は13歳～23歳であった。また、闘病記は死別後10ヵ月～7年に出版されていた。

3. データ分析の一部は、資料1、2、3に示した (資料1：逐語録とコード、資料2：コードとコードの

表1 対象とした闘病記

ケース	著 書	著 者	出版年	出版社	父 or 母	病 名	発病年齢	死亡年齢	父 or 母と対象者との続柄	死別時年齢 (対象者)	執筆時年齢 (対象者)	出版時年齢 (対象者)	抜粋頁数	死別後の対象者の進路選択
a	天との通信	森脇佐和子	2002	文芸社	父	耳下腺腫瘍	49	51	長女	17	18	25	147頁分	
b	普通にしようや	加納秀樹	2001	どうも社	父	肺がん	不明	不明	長男	17	18	18	102頁分	
注；c～h の内容の著者名														
c	お父さんがいるって嘘ついた；ガン・闘病から死まで 第1章. がん遺族の声 ①子供たち	あしなが育英会編	1997	広済堂	母	子宮がん	不明	不明	次女	17			10頁分	
d	第2章. 天国の泥棒	山中喜代子	1997	広済堂	父	胃がん	不明	不明		14	15		7頁分	高校退学せず
e	第3章. 何度も考えた「退学」	中田裕美子	1997	広済堂	父	不明	不明	不明	次女	13	17		10頁分	都立高校退学
f	第3章. 洗えない父のセーター	蛭田真美子	1997	広済堂	父	肝臓がん	不明	40		不明	15		4頁分	
g	第3章. ガンと闘う医者になりたい	橘俊平	1997	広済堂	父	胃がん	不明	不明		不明	15		7頁分	
h	第3章. はじめて呼んでくれたみゆきちゃん	小林みゆき	1997	広済堂	父	大腸がん	不明	不明		14	15		15頁分	高校進学希望
注；i の内容の著者名														
i	あなたの知らない「家族」 うす紅色のカーネーション	柳原清子	2001	医学書院	母	乳がん	42	51	長女	14			18頁分	
注；j～k の内容の著者名														
j	がんなんかに殺させるもんか メスを持った天使と悪魔	あしなが育英会編	2003	広済堂	父	食道がん	43	44 (1ヵ月)	長男	15	21	21	4頁分	
k	わずか二十日で消えた命	不明	2003	広済堂	父	肝臓がん	46	46 (1ヵ月)	長女	16	23	27	26頁分	大学進学
l	パパ	松本直美 ほか	2000	文芸社	父	胃がん	47	48	次女	23	23	23	19頁分	医療系を検討

空欄：記載無し

資料1 逐語録とコード（コードの修正）

目的：青年期にがんて親を亡くした人の気持ちをあきらかにする

逐語録	コード	修正コード（要約）
<p>ケースj:「がんなんかに殺させるもんか」 （中学生で死別） 母の手記 男性 Nさん</p> <p>子供たちはj-1) <u>これから男同士でお酒を飲みに行くとか、そういうことができなかったのが残念だと言います。</u>長男は父親に対して反抗期に入ろうとしているときにその対象が入院しちゃったから、その反発をどこに出したのかっていうのをすごく知りたかったの。それでこの間、初めて聞いたんですよ、「どうしたの?」って聞いたらj-2) <u>「先生に反抗した」</u>って、あのままお父さんが生きていたらって話はたまにするんです。3人で、そうするとj-3) <u>自分は違っていた、今の自分はなかったって上の子はいいんです。</u></p> <p>あるとき子供がj-4)「お母さん、学校はやめなくていいよね」って聞くんです。「辞めなくていいよ、そのままでもいいんだよ、だれかにきかれたの?」っていったら「先生が大丈夫なのって言ってたから、一応大丈夫ですっていったけど」って。</p> <p>ケースk:「がんなんかに殺されるもんか: わずか20日で消えた命」高校1年（7年後の手記）女性 Yさん</p> <p>k-1) <u>父が亡くなると最初に聞いたとき、うそだと思って「えっ、何を言っているの」という感じでぜんぜん信じられませんでした。</u>いきなり車の中で、母に「お父さんががんなの」といわれたけれどk-2) <u>治ると思っていた</u>k-3) <u>死ぬとも思わなかったし、</u>k-4) <u>不安もなくて、はじめはその大変さがわかりませんでした。ただ、私は父が後わずかしかな生きられないことを聞いて、k-4) 実感はわかなかったけれど、k-5) 言ってもらってよかったと思います。k-6) 言ってもらったからこそ、父の死後、ある意味で冷静にやってこられたのだと思います。私は母からの話を聞いているだけで父の死の場には立ち会わなかったの、最後にすごい血の量を吐いたところも見ていなくて、きれいになったところしか見ていません。k-7) 父の死を受け入れられるようになったのはずいぶん後になってからです。l-8) 危篤の知らせを聞いて病院に向かう途中も「まさかそんなことはないだろう」とずっと思っていたし、l-9) お葬式の間も悲しかったけれど実感はなかった。k-10) <u>1年2年と月日がたっても信じられなかったけど、</u>k-11) <u>最近になってやっと「やはり死んでしまったんだ」と思うようになりました。</u>k-12) <u>父が亡くなった当時は、本当に悲しみがあつたのかどうかはわからなかったです。先生からk-13) あと1ヵ月くらいだと聞いたときは、転院したほうがよいのかどうかはわかりませんでした。私は一生懸命考えなくてはいけないという気持ちがあった一方で、どこかで父が死ぬということが、どうしてもわかりませんでした。</u></u></p>	<p>——— <u>前略; a~i, 略</u> ———</p> <p>j-1) <u>これから男同士でお酒を飲みに行くとか、そういうことができなかったのが残念だ</u></p> <p>j-2) (反抗期に入ろうとしているときに入院したから)「先生に反抗した」</p> <p>j-3) (あのままお父さんが生きていたら) <u>自分は違っていた、今の自分はなかった</u></p> <p>j-4) <u>「お母さん、学校はやめなくていいよね」</u></p> <p>k-1) <u>父が亡くなると最初に聞いたとき、うそだと思って「えっ、何を言っているの」という感じでぜんぜん信じられませんでした。</u></p> <p>k-2) <u>治ると思っていた</u></p> <p>k-3) <u>死ぬとも思わなかった</u></p> <p>k-4) <u>不安もなくて、はじめはその大変さがわかりませんでした</u></p> <p>k-5) <u>実感はわかなかった</u></p> <p>k-6) <u>言ってもらってよかったと思います。言ってもらったからこそ、父の死後、ある意味で冷静にやってこられたのだと思います。</u></p> <p>k-7) <u>父の死を受け入れられるようになったのはずいぶん後になってからです。</u></p> <p>k-8) (危篤の知らせを聞いて) <u>まさかそんなことはないだろう」とずっと思っていた</u></p> <p>k-9) <u>お葬式の間も悲しかったけれど実感はなかった。</u></p> <p>k-10) <u>1年2年と月日がたっても信じられなかった</u></p> <p>k-11) <u>最近になってやっと「やはり死んでしまったんだ」と思うようになりました。</u></p> <p>k-12) <u>父が亡くなった当時は、本当に悲しみがあつたのかどうかはわからなかった</u></p> <p>k-13) <u>あと1ヵ月くらいだと聞いたときは、転院したほうがよいのかどうかはわかりませんでした。</u></p> <p>——— <u>以下略</u> ———</p>	<p>j-1) これから男同士でお酒を飲みに行くとか、そういうことができなかったのが残念だ【j-1)】</p> <p>j-2) (反抗期に入ろうとしているときに入院したから)「先生に反抗した」【j-2)】</p> <p>j-3) (あのままお父さんが生きていたら) 自分は違っていた、今の自分はなかった【j-3)】</p> <p>j-4)「お母さん、学校はやめなくていいよね」【j-4)】</p> <p>k-1) 父が亡くなると聞いてもぜんぜん信じられなかった。治ると思っていたから不安もなく大変さもわからなかった。 【k-1), k-2), k-3), k-4), k-5)】</p> <p>k-2) 父の病気を告知してもらったからこそ冷静にやってこれたと思うから、告知してもらってよかったと思っている。 【k-6)】</p> <p>k-3) 死について考えなくてという一方で、死ぬということがわからなかった。悲しかったかどうかはわからない。 【k-7), k-8), k-9), k-10), k-11), k-12), k-13)】</p> <p>k-4) 友達のお父さんの話を聞くと、父を思い出す。そのときは友人は私に父がいないことを意識してないと感じるし、うらやましくも思う。 【k-14), k-15), k-16), k-17), k-18)】</p>

資料2 コードとコードのクラスタリングおよびラベル付け

目的：青年期にがんで親を亡くした人の気持ちをあきらかにする

コード	コードのクラスタリング	ラベル付け(サブカテゴリー)
<p>——— 前 略 ———</p> <p>j-1) これから男同士でお酒を飲みに行くとか、そういうことができなかったのが残念だ【j-1)】</p> <p>j-2) (反抗期に入ろうとしているときに入院したから)「先生に反抗した」【j-2)】</p> <p>j-3) (あのままお父さんが生きていたら)自分は違っていた、今の自分はなかった【j-3)】</p> <p>j-4)「お母さん、学校はやめなくていいよね」【j-4)】</p> <p>k-1) 父が亡くなると聞いてもぜんぜん信じられなかった。治ると思っていたから不安もなく大変さもわからなかった。【k-1), k-2), k-3), k-4), k-5)】</p> <p>k-2) 父の病気を告知してもらったからここまで冷静にやってこれたと思うので、告知してもらってよかったと思っている。【k-6)】</p> <p>k-3) 死について考えなくてという一方で、死ぬということがわからなかった。悲しかったかどうかもわからない。【k-7), k-8), k-9), k-10), k-11), k-12), k-13)】</p> <p>k-4) 友達の父の話を聞くと、父を思い出す。そのときは友人は私に父がいないことを意識してないと感じるし、うらやましくも思う。【(k-14), k-15), k-16), k-17), k-18)】</p> <p>——— 以下略 ———</p>	<p>——— 前 略 ———</p> <p>a-49) 大好きやからっ！. パパと同じ道行くから！. 音楽受け継ぐからあ！. 【a-108), a-109)】</p> <p>a-63) 進路決定にも、父の死が大きく影響した。大学に行くつもりだったが、やりたいことが決まっているなら、大学での時間やお金がもったいない。人はいつ死ぬかわからないからできることをできるときにやって、人生に悔いが残らないようにしたいと思うようになった。やりたいことを後回しにしても、それが本当にできるかは分からないから。【a-139), a-140), a-141)】</p> <p>b-47) 父の遺志を代行することができた。今後も続けて行きたい。【b-92)】</p> <p>b-49) 僕は父の闘病記を書くに当たり、自分に心の変化や「誰かに伝えたい」という気持ちがあることに気づき、また、父がいなくなって初めて気づいたことや、後悔していることがあることを、病氣と闘っている人やその家族の人に伝えて少しでも役に立ちたいと思った。【b-94, b-95, b-96, b-97, b-98, b-99)】</p> <p>c-1) 母が死んだとき、弟の世話をするために高校を退学した(高校を卒業してやりたいことがあったがあきらめた)。【C-1), C-2), C-3), C-4), C-5), C-6), C-7), C-8)】</p> <p>e-3) 母ががんばっている姿を見ると、自分も高校を中退して働こう。【e-4), e-5), e-6)】</p> <p>e-4) これからどうなるか分からないけど、一生懸命働いて母に楽をさせてあげたい。【e-7), e-8), e-9), e-10)】</p> <p>f-2) 私にはもう悲しんでいられる時間はない。高校受験が待っている。</p> <p>g-3) 今までは父を頼っていたがこれからは自分の道は自分で作るしかない。【g-3), g-4)】</p> <p>g-4) できれば医者になってがんと闘いたい。そのために一生懸命頑張りたい。【g-5), g-6), g-7)】</p> <p>j-4)「お母さん、学校はやめなくていいよね」【j-4)】</p> <p>k-5) 母のことを考えて進学をあきらめたり、就職を我慢することはあった。医療系に進もうかと思ったこともあった。【k-19), k-20), k-23)】</p> <p>k-8) 父の死を経験して、祖母を看取ることになるかもしれない考えると、そういう(医療系の)資格を取りたいなと考える。【k-25)】</p> <p>——— 以下略 ———</p>	<p>進路や人生観が変化する</p> <p>進路決定にも、父の死が大きく影響</p> <p>いつ死ぬかわからない、悔いが残らない人生を</p> <p>父の遺志を受け継ぐ</p> <p>人生に悔いが残らないように</p> <p>父の死で気づいたことや、後悔</p> <p>進学を退学しようか</p> <p>高校を中退して働こう</p> <p>一生懸命働いて母を楽にさせてあげたい</p> <p>成長した自分</p> <p>人生に悔いが残らないように</p> <p>進学をあきらめたり、就職を我慢したり</p> <p>医療系の学校に進もうか</p> <p>——— 以下略 ———</p>

資料3 クラスタリング後のラベル付けとカテゴリー

目的：青年期にがんで親を亡くした人の気持ちあきらかにする

クラスタリング後のラベル付け (サブカテゴリー)	カテゴリー
・死に直面し衝撃 ・親の死に対する否認・逃避 ・悲しみを押し殺し孤独 ・親のいる人が羨ましい	1. 親の死を受け止められない
・父の闘病に対する自分の態度に後悔 ・無理にでも一緒に外に連れ出してくれた母に感謝 ・父親は幸せな人生だったか想察	2. 親との生活を振り返る
・人生に悔いが残らないように ・進学をあきらめようか、就職を我慢しようか、医療系に進もうか	3. 進路や人生観が変化する
・生きているときには感じることで きなかった親の偉大さを感じる ・心の中にいる親の存在を確認する ・親の死を受け止め成長した自分	4. 親のいない生活への適応

クラスタリングおよびラベル付け、資料3：さらにクラスタリングとラベル付け).

4. 逐語録からあきらかにされたカテゴリーは4つ、すなわち、1. 親の死を受け止められない、2. 親との生活を振り返る、3. 進路や人生観が変化する、4. 親のいない生活への適応、なお、それぞれ、複数のサブカテゴリーがあり、計9つ抽出された。

以下に1例の具体を示すと、1. 親の死を受け止められない、というカテゴリーには、1) 死に直面し衝撃、2) 親の死に対する否認・逃避、3) 悲しみを押し殺し孤独、4) 親のいる人が羨ましい、という4つのサブカテゴリーが列挙された(表2)。

表2 死別後の気持ち

カテゴリー	サブカテゴリー	コード(コード内容/要約の一部を示す)	ケース
1. 親の死を受け止められない	1) 死に直面し衝撃	「父の肉体との別れ、父に2度と触れられないことをまだ覚悟できなかった」 「『まさか! 何で!』と叫び、父の死を考えることができなかった」	a・b・d・e・g・i
	2) 親の死に対する否認・逃避	「さっき、お父さんの最後の闘いを見たのにまだ心が認めない」 「父の死について考えなくてはという気持ちの一方で、どこか父が死ぬということがどうしてもわからなかった」	a・b・g・i・l
	3) 悲しみを押し殺し孤独	「辛いことを忘れるくらい何かに熱中したいと思う」 「どんなに明るく笑っても、孤独に耐えられなかった」	a・h
	4) 親がいる人が羨ましい	「友達が父親の話をする、父のことを思い出す」	i・l
2. 親との生活を振り返る	1) 父の闘病に対する自分の態度に後悔	「疲れのためかわがままな父に嫌気がさし、冷たくあしらってしまった、そのときの自分を後悔している。」	a・b・j・l
	2) 一緒に外に連れ出してくれた母に感謝	「たまには一人で居る時間も欲しかった。しかし、今では無理やりにでも一緒に連れ出してくれた母に感謝している。」	k
	3) 父親は幸せな人生だったか想察	「父は自分の今までの人生を振り返って、本当の幸せを掴み取ったのだろうか。」	a・b
3. 進路や人生観が変化する	1) 人生に悔いが残らないように	「人はいつ死ぬかわからないからできることをできるときにやって、人生に悔いが残らないようにしたいと思うようになった。」	a・b・c・d・f・g・j・k・l
	2) 進学をあきらめようか、就職を我慢しようか、医療系に進もうか	「母のことを考えて進学をあきらめたり、就職を我慢することはあった。」 「医療系に進もうかと思ったこともあった。」	j・k・l
4. 親のいない生活への適応	1) 生きているときには感じることできなかった親の偉大さ	「正面から死と向き合い立ち向かう父の強さを見て、この歳になって父はまた成長したように感じた」 「多くの人が口々に父のことを『立派な人だった』『尊敬に値する』と褒めていた(略)それに今まで気づかなかったことを悔いた」	a・b・h・k・l
	2) 心の中にいる親の存在を確認	「今でも父が甦るのは父がずっと私たちの心で生き続けている証だと思っている」 「私の心の中で父は生きていて、すぐそばで私を支えてくれる」	a・d・e・f・h・i・l
	3) 親の死を受け止め成長した自分	「父の生きた姿や父への感謝の気持ちを忘れずに生きていくことが父に対する最大の供養になると思えるようになった」	a・c・e・f・h・k・l

考 察

1～4の4つのカテゴリーに沿って考察する。

1. 【親の死を受け止められない】

1) <死に直面し衝撃を受ける>ことは、山本⁴⁾のいう「脅威に対する衝撃反応」である。対象者は「親の死と直面し何も考えられない」状況にいた。また「足ががくがく震える」など身体的症状からもその衝撃の大きさが分かる。2) <親の死に対する否認・逃避>では「親のことを忘れるくらい何かに熱中したい、親のことは考えたくない」という感情が表れていた。それは能野ら⁵⁾のいう「自我の崩壊を防ぐための防御機制」である。死と向き合うことができず、意図的に考えないようにしている。3) <悲しみを押し殺し孤独と闘う>では、悲しい思いを持ちながらも、家族に心配をかけたくない葛藤があり「孤独に耐えなければならない」感情が表れていた。悲しみを押し殺し、家族のためにしっかりとしようとする責任感が感じられた。さらに学校でも「友達から普通に接してほしい」一方で「友達が笑っているのを見るとはじき飛ばされたような気持ちだった」など、4) <親がいる人を羨ましく思う>ようになり、孤独を感じている。柳原⁶⁾はこのような気持ちは「子どもの成長過程にあるアンビバレントな感情の揺れ」と表現している。そうした感情をもちつつも、他者に話そうとは思っておらず、また他者から干渉を望まず、そっとしておいてほしいと願っている。これを柳原⁷⁾は「不安定になる自分を立て直したいという気持ちの表れ」と表現している。

否認や逃避、孤独や羨望といった揺れる感情には一定の段階があるとは限らない。このような感情を繰り返しながら徐々に親の死と向きあうようになれる。

2. 【親との生活を振り返る】

1) <闘病中の自分の振り返り>では「闘病中に反抗したことや冷たい態度をとってしまったことを悔やむ」気持ちや「親のことを深刻に考えてなかったことに気付く」という反応を示していた。ここでは闘病中の自分の態度を反省し、後悔する感情が現われていた。2) <親の人生や病気に対して想察する>では、「親の人生は幸せなものだっただろうか」など疑問を表出したり、「病気と正面から向き合って頑張っていた」と親のことを誇りに思う感情が表れた。闘病中の親や自分自身の状況を振り返ることで不満や疑問が表出され、親のことを少しずつ現実のものとして捉えることができるようになって

きている。

3. 【進路や人生観が変化する】

将来への進路を決定することは青年期特有の重要な通過点である。「親の死」という大きなライフイベントの時期が早まったことで、対象者の「進路や人生観が変化する」と考えられる。その変化は様々であるが、対象者の中には遺された母や兄弟のために高校を退学し、大学進学を断念して就職を選ぶ者もいた。他には、親の人生を振り返った上で親と同じ道を歩もうとする者や親の遺志を代行しようとする者、「がんと闘う医者になりたい」「医療職に就きたい」という思いが生じる者もいた。さらに、「人はいつ死ぬか分からないから、今できることを精一杯今やって人生に悔いが残らないように生きたい」と考えるようになるなど、親の病気や死そして生き様から、対象者は人生観に影響を与えられたと考える。これらの過程から、自分自身で進路を選択し将来に向かって前進しようとする一般の青年期の進路決定に、親の死という特別な経験が起ることによって、制限あるいは新たに生じた気持ち加わり、対象者の進路や人生観が変化していることがわかる。

4. 【親のいない生活への適応】

対象者は時間の流れやさまざまな葛藤を通して、親の死を受容し「親のいない生活へ適応」していくと述べている。親の死後、周囲の人から親を称える言葉を聞いたり、親の人生や闘病生活を振り返ることで、1) <生きているときに感じることでできなかった親の偉大さを感じる>ことがわかった。親の人生に感銘を受け、病気と闘い死と正面から向き合う姿に偉大さを感じることで、親のいない生活への適応に対する力となっている。親への尊敬、憧れを感じた対象者は、2) <心の中にいる親の存在を確認する>ようになる。自分を育て、立派に生きた親の姿から、人生においての学びを得て、「いつでもお父さんは心の支えになっている」など、自分はずっと親と共にいるのだと感じるようになる。将来に向けての一步を自らの力で踏み出し、自分の中に親の存在を確認することで、3) <親の死を受け止め成長した自分>を感じることができている。

結 論

闘病記より、青年期にがんで親を亡くした人の死別後

の気持ちが表現されている言動を逐語録化し分析した。その結果、すなわち1) 親の死を受け止められない, 2) 親との生活を振り返る, 3) 進路や人生観が変化する, 4) 親のいない生活への適応, の4つのカテゴリーを抽出した。なお, それぞれのカテゴリーには複数のサブカテゴリーで構成されていた。

青年期に親と死別した人の気持ちは, 学校(高校など)でも家でも感情の板挟みとなって葛藤を繰り返し, 誰にも打ち明けられずに孤独に耐える。しかし, 生前の親との時間や親の生きざまを想察することで, 死と向き合い始める。また, その後の進路や人生観の変化も, 生前の親からの学びが影響を及ぼしている。

文 献

- 1) 柳原清子：がんターミナル期の親を看取る思春期の子どものニーズに関する研究, 死の臨床, 26(2), 241, 2003.
- 2) 宮崎貴久子：死別が家族に与える影響：残す思い, 残される思い, ターミナルケア, 24(3), 189-193, 2004.
- 3) ハヴィガースト著. 莊司雅子(訳)：人間の発達課題と教育；幼児期より老年期まで, 137, 牧書店, 1948.
- 4) 山本恵子：終末期癌の親をもつ成人期の子の死への気付きに対する反応と対処行動, 高知女子大学看護学会誌, 30, 12, 2005.
- 5) 能野明美, 戸井間充子, 森山美和子：悲嘆・予期的悲嘆；そして未成年の子どもが親の死にどのように関わるのか, 臨床看護, 23, 431, 1996.
- 6) 柳原清子：がんターミナル期の親を病院で看病する子どもの悲嘆, 死の臨床, 23, 257, 2000.
- 7) 柳原清子：がんターミナル期の親を看病する子供の心情の研究, 死の臨床, 25, 194, 2002.

*The young adults feelings after losing their parents to cancer in adolescence :
a study based on the written records of the young adults fight against cancer*

*Hisayo Kaneko¹⁾, Yuka Koyanagi¹⁾, Kumiko Sonoda¹⁾,
Hiroe Yamaguchi¹⁾, and Keiko Sakamoto²⁾*

¹⁾Department of Nursing, Health Sciences, Nagasaki University Faculty of Medicine, Nagasaki, Japan

²⁾Osaka City University School of Nursing, Osaka, Japan

Abstract

Objective : The Objective of this study identified the feeling of young adults after they lost their parents who died of cancer.

Methods : Some of the young adult of these parents had recorded their fight against cancer in their own way, and we first extracted from their records the parts in which their feelings following their parents' death were written down or the parts in which their feelings about their parents' death were hinted in the form of what they said or did. We then transcribed these parts word for word, and made an analysis of them.

Results : We have found that these parts consist of four categories : 1) being unable to accept their parents' death, 2) looking back on the life they led with their parents, 3) the change of their career or their outlook on life, and 4) adapting to the life in which their parents no longer exist. Each category comprises more than one subcategory.

Conclusions : It is important for nurses to understand and support the complicated feelings of those young adult whose parents died in young adult. It can be an effective suggestion in influencing the mental attitude the young adult assume following their parents' death.

Key words : young adult, parents' death, feeling, cancer